

# 野手の庚申塔

## 村や集落の足跡

匠 探訪

— 40 —

野手地区竜蔵院参道入り口に子安大明神がまつられ、門口に「庚申（こうしん）さん」とよばれる石造物があります。この庚申塔に刻まれた文字から次のことがわかります。

子安大明神の敷地は、大木太右衛門が寄付し、1740年（元文5年）8月22日に野手村上野馬場（上ノ馬場）集落のすべての講仲間と大木太右衛門、伊藤太良兵衛が願主となり庚申塔が立てられました。

野手村をはじめ市域の村も

ら（現在では大字単位）は400年ほど前には生活圏である村域が確定しました。

野手村は初め、押田氏による支配でしたが、1670年（寛文10年）ごろには4つの支配に分けられました。村の規模や米の生産量を示す村高は当時1150石（こく）で市域58（旧八日市場地区52か村・旧野栄地区6か村）か村では最多でした。このころから「上ノ馬場」など小集落ごとの活動が多くなったようです。幕末ごろには家数315軒ほどの市域2番目の大村となりました。

竜蔵院入り口にある庚申塔  
（野手地区野手）

庚申塔は円長寺門前にも2基あり、1708年（宝永5年）5月に立てたものには熱田、佐久間、大川、伊藤、石毛、渡邊姓を名乗った12人の名が刻まれています。信仰仲間で組織する

講員が村での有力な農民層とみられ、仲間すべての苗字と名前を刻んでいることが特徴といえます。

これより32年後の1740年10月に立てられた塔には、苗字を刻まない、例えば「左兵衛、善兵衛」など43人の名前があります。

野手の3基の庚申塔から、1708年には有力農民だけの庚申講があったこと、1740年には「上ノ馬場」集落単独と他集落の講仲間により庚申塔を立てたことが知られます。

庚申講は、男性の集まりで60日ごとに巡ってくる庚申（かのえさる）の日に宿（やど）に集まり、食事や歓談し夜を過ごす行事でした。そして60年ごとの庚申年を記念して庚申塔を立てました。

旧八日市場市域では真言宗や天台宗寺院の檀家（だんか）の村むらでは村ごとや集落ごと、あるいは個人などで庚申塔を立てました。古いものでは1680年（延宝8年）のものが八日市場村、大寺村などにあり、60年後の1740年、1800年、1860年と次第に増加しました。

関八日市場図書館 ☎ 73・3746

